

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

10代母親への妊娠期からの心理的支援に関する一考察 携帯電話端末を活用した支援の分析

著者	中原 美恵, 上田 美香, 唐田 順子
著者別名	NAKAHARA Yoshie, UEDA Mika, KARATA Noriko
雑誌名	ライフデザイン学研究
巻	10
ページ	157-174
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010285/



10代母親への妊娠期からの 心理的支援に関する一考察 —携帯電話端末を活用した支援の分析—

A study on psychological support from the pregnancy period to the teenage mother
—Analysis of the support that utilized the E-mail for the teenage mother—

中原 美 恵 上 田 美 香 唐 田 順 子
NAKAHARA Yoshie, UEDA Mika, KARATA Noriko

要旨

われわれは、10代で出産した子育て家庭が妊娠期から出産・子育て期にどのような困難を抱え、福祉的な支援を必要としているのか、特に、地域で暮らす10代で妊娠・出産・子育てをする母親の実態とその課題を明らかにするため、調査研究を行った。

本論文では、調査協力者である10代の母親に対する携帯電話端末のEメール機能を活用した支援の記録を抽出、分析し、質的検討を行った結果を報告する。Eメールを活用した支援実践を通して、①養育の手順を具体的に伝える養育者モデルがない、②必要なことを身近な大人に気軽に聞けない、③必要な養育の知識、技術を具体的に学ぶ機会を自力で得られない、④子育ての情報を得る手段に限られるなど、10代母親に特有の困難が明らかになった。こうした困難性に対して、Eメールや携帯電話を活用した支援により、状況を好転させることができることが確認された。また、Eメールの内容分析から、Eメールによる支援がもたらした最も顕著な効果は、保育士、助産師の専門性を生かした、即応性の高い情報提供力と、言語（テキスト）によるたゆまぬ励まし、エンパワーメントの提供によるものであった。10代母親が安心感を持って養育に向かえるよう、一貫して肯定的メッセージを送り続け、自己効力の感覚を高める役割を担った意味は大きい。一方、見捨てられ感や孤立感等が深刻なケースでは、Eメールによる情報支援や情緒的支援といった間接的支援により関係を継続することは困難であり、より積極的な直接介入（対面相談、同行支援等）により、物理的な援助の手応えが伴う手立てを講じる必要があることも明らかになった。

キーワード：子育て支援 心理的支援 10代出産女性 Eメール 児童福祉

1. はじめに

近年、子育て支援、少子化対策の重要性が広く認識されるようになり、各自治体においては、今まさに、子ども・子育て支援新制度（平成24年8月に成立した「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正法」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」に基づく制度）に向けた検討がなされている。しかし、関心の中心は、待機児童対策に代表される保育サービスの量的拡大に置かれ、ハイリスクケースに対する支援の充実等、サービスの質的転換に対しては、十分踏み込んだ議論がなされていないという声もある。

われわれは、平成20年度から地域におけるハイリスクケースの支援のあり方を探る研究（森田明美研究代表）を展開してきた。10代で妊娠・出産し、地域において子育てを継続している家庭を対象とした介入支援型の調査研究である。その背景には、母子家庭数の増加、低年齢化があり、特定妊婦である10代母親の実態をふまえた、地域における妊娠期からの福祉的支援システムの開発が重要課題であるという認識があった。その特性から、児童福祉および子育て支援の両方の視点に立って検討されるべき課題でありながら、当事者の実態が十分把握されておらず、公的支援ネットワークにつながりにくい現実も把握していた。

そこで、これまで主に母子保健・産科医療等の領域で進められてきた先行研究をふまえつつ、10代母親の妊娠・出産・子育ての実態と問題状況の把握のため、首都圏A市の協力を得て、A市における継続的面接調査を実施することとした。また、調査経過において把握される支援課題に対しては、必要な支援的介入を行い、地域における継続的支援システム構築のためのデータを得る計画とした。

先行した首都圏における10代親支援の研究実践から、われわれは、調査対象である10代女性との関係構築およびその継続の困難性については、前もって想定していた。よって、この課題に対する方策として、携帯電話端末を用いたEメールによる関係構築を試み、確実に迅速な応答、根気強い声かけ等、親密なかかわりを維持する「10代サポーター」（調査者ら）からの働きかけを行うことを研究デザインに組み込むことにした。携帯電話端末のEメール機能の活用により、高い応答性と10代母親の脆弱な自我に対する非侵襲性を確保できると考えた。さらに、調査地A市から離れた地点からでも10代サポーターによる支援が実現可能となることも、携帯電話端末の導入の大きな利点であった。また、対象者の特性、支援ニーズ等を考慮し、これまでに10代母親支援の豊富な実践経験を有する研究メンバー（上田美香（U）：保育士および社会福祉士有資格者 および唐田順子（K）：助産師有資格者）が1台ずつ固有の携帯電話端末を保持することとした。なお、対象者とのかかわりの継続性を担保するため、研究初期から原則対象者ごとに担当を決める体制をとった。10代母親の特性を考慮し、昼夜を問わず対象者からのコンタクトがあっても、可能な限り応答し、一貫した対応をしてこそ、情緒的な絆を確立できると想定したためである。

本報告では、研究初期（2009年1月～2011年8月）の携帯電話端末を活用したEメールによる10代母親支援の具体的内容を取り上げ、10代母親の支援ニーズおよびその支援の心理的意味について分析、検討することにより、10代母親支援のあり方を探る。特に、10代親支援に関して、専門性を背景とした高い支援スキルを持つ10代サポーター二名（U、K）のテキストデータを分析、考察することにより、10代母親に対する心理的支援のあり方を明らかにする。

2. 地域で暮らす10代母親支援の研究概要

前項で述べたように、10代母親に対するEメールを活用した支援は、平成20年度より開始された「10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する日韓比較研究」（研究代表：森田明美）の一部として行われた「地域で暮らす10代家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する研究」に組み込まれたものがある。以下にその研究の概要を記す。

<目的>

本研究は、地域で暮らす10代母親を対象とし、10代家庭における子育ての実態および支援ニーズを把握するとともに、地域における包括的かつ継続的な支援プログラムを開発する。それにより、地域で暮らす10代子育て家庭に対する妊娠期からの継続的支援システムの構築のあり方を明らかにする。

<方法>

方法1：半構造化面接によるインタビュー調査

面接時期：妊娠期（2回：妊娠中期および後期）

子育て期（4回：出産後1か月、4か月、10か月、1歳10か月）

面接内容：母親、父親の生活および心身の状況、親役割への適応状況、

子育てに関する課題、子どもの成長・発達の観察

面接場所：調査協力者地区の地域子育て支援センター等公的子育て支援施設

方法2：支援的介入を伴うオンデマンド型インタビュー調査

方法1による聞き取り調査および専用携帯電話端末を用いたEメールおよび電話による相談体制を組み、調査協力者の課題や不安・悩み等を把握、適宜必要な介入を行いながら調査を進める。地域（A市）における支援関係者との情報共有を行い、現状の地域支援資源を活用しつつ、その経過で見出される課題についても調査する。

（方法2においては、携帯電話端末を用いたEメールによる相談支援、心理的支援が重要な役割を果たした。本報告では、この取り組みを取り上げる。）

<調査対象者への依頼手続と倫理的配慮>

調査協力者への依頼は、次のような手続きを用いた。

- ①母子健康手帳交付時に、A市担当者から調査依頼書を用いて調査の目的・方法・倫理的配慮について説明し、調査協力の意志を確認する。
- ②①の時点で同意の得られた母親に対し、研究チームの担当者から携帯電話端末を用いて連絡を取り、対面面接を設定する。また、今後の連絡および支援の手段として専用携帯電話端末Ⅰ・ⅡのEメール機能を活用する方法を説明し、Eメール送受信の確認を行う。
- ③初回面接時に、研究チーム担当者が研究目的および倫理的配慮を説明し、再度同意の意思を確認する。その上で、倫理上の配慮事項を説明し、同意書を提出してもらう。
- ④インタビュー調査を開始、継続する

なお、研究に際しては、社会福祉学会の倫理規定を順守し、東洋大学の倫理委員会での審査を受け、承認を得た。

<調査対象者の状況>

A市における10代女性の出産数は、平成21、22年度では、合計37名であった。そのうち、第一期調査期間（平成21年1月から平成23年7月）に、母子手帳交付時に本研究への調査協力の手承が得られた10代母親は、19名であり、概ね半数近いケースで協力の意思が示された。しかし、この19名のうち、上記②、③の手続きを経て、調査が実施されたものは、13名であった。それぞれ、妊娠期から子育て期に1回～5回のインタビュー調査を行った。残る6名は、①の時点で調査協力の意思表示があったものの、その後、連絡が取れない、協力を断られるなどの事由により調査が不成立となった。調査協力者13名の分娩時年齢、面接の状況等を表1に示す。

表1の最下段には、平成23年7月までに専用携帯電話端末Ⅰ・Ⅱにより送受信されたEメールのうち、内容分析の対象としたEメールの数を記した。

表1 母親の分娩時年齢、面接回数および調査継続状況

n = 13

	M1	M2	M3	M4	M5	M6	M7	M8	M9	M10	M11	M12	M13
年齢	18	17	19	19	16	18	19	18	17	17	19	19	19
面接	5回	2回	1回	4回	1回	4回	1回	1回	1回	2回	3回	1回	2回
状況	継続	中断	中断	中断	中断	継続	中断	中断	中断	継続	継続	継続	継続
分析	55	なし	18	113	なし	97	4	6	19	56	32	なし	43

3. 携帯電話端末を用いたEメールによる支援の分析方法

活用する携帯電話端末の機種選定にあたっては、契約上の様々な制約があった。当時活用可能な機種は、KDDI株式会社1機種のみであり、同機種2台をリース契約により導入した。内容分析に向け、まず携帯電話端末本体に残る送受信Eメールの電子ファイルを外部メディアにすべて書き出す作業を行った。

1) 分析対象としたEメール数

平成21年1月～平成23年8月までの2台（端末Ⅰ・Ⅱ）のEメール送受信総数は、次の通りであった。

- ・携帯電話端末（Ⅰ）：受信メール 586通、送信メール895通
- ・携帯電話端末（Ⅱ）：受信メール 666通、送信メール480通

本研究で分析対象とした支援メール総数は、1140通、その内対象者⇄10代サポーター間のEメールは、574通（対象者から発信133通、10代サポーターから発信441通）である。

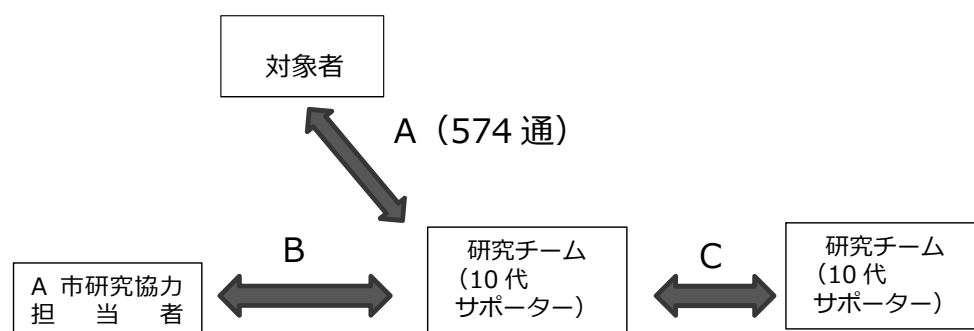


図1 携帯電話端末の活用パターン

また、送受信の対象、内容は、図1に示すA、B、Cの三パターンに分類された。対象者、A市研究協力者、研究チーム（10代サポーターU、Kを中心として）の三者間のコミュニケーションを図るため、活発に活用されたことがわかる。

2) 携帯電話端末のEメール分析方法

平成21年1月～平成23年8月までの期間、2台の研究専用携帯電話端末に残されたEメール記録の整理を以下（1）～（5）の手順で行った。

- （1）各携帯電話端末の記憶ファイルを読み出し、携帯電話端末（Ⅰ）送信、同受信、携帯電話端末（Ⅱ）送信、同受信の該当事期のファイルを作業用ホルダーに整理する
- （2）研究用携帯電話端末の記憶ファイルは、拡張子VMGであるため、作業用エクセルファイルに書き出す作業が必須となる。このため、1ファイルずつをMS Word Padを用いて開き、テキスト情報としてコピーし、転記する
- （3）上記（2）において転記する内容は、①ファイル番号、②送信および受信の日時、③送信および受信の発信者名および送信者名、④Eメールの件名、⑤Eメール本文 である
- （4）上記（2）において転記されたテキスト情報を、作業用エクセルファイル上で、調査対象者ごとに分類できるよう、カラーコードを付す
- （5）送信および受信日時でソート作業が可能となるよう、送受信日時コードを付す

以上の手順を経て、Eメールの内容を整理した結果、上記図1の＜A＞～＜C＞の活用パターンのうち、表2に示すように、送受信されたEメールの中核は、10代サポーターから対象者への発信（A-1）であり、実際に対面コミュニケーションが実現するまでの関係づくりのために発信された内容であった。

＜B＞および＜C＞の活用パターンについては、後述することとし、まず＜A＞について述べる。

表2 携帯電話端末により送受信したEメールの概要

A：調査対象者⇄調査者：10代サポーター	
A-1	(調査者：10代サポーター⇒対象者)
	①自己紹介および第1回面接の日時／場所調整 ②第1回面接への動機づけ、面接会場までの誘導 ③調査開始後の対象者の状況確認、関係維持の声かけ ④対象者からの質問、不安の訴え等への対応 ⑤時期ごとの声かけ、次回面接への動機づけ
A-2	(対象者⇒調査者：10代サポーター)
	①研究開始までの手続き確認、面接日時・場所の確認 ②面接日時変更やキャンセルの連絡 ③子どもについての質問、子育て上の不安の訴え ④携帯電話メールアドレス変更や転居の連絡

4. Eメールによる支援の内容分析 活用パターン＜A＞

調査対象者と10代サポーター（U、K）間で送受信されたEメールの概要は、表2に整理した通りである。抽出したEメールのテキストデータをもとに、内容分析を行った結果を以下に記す。

1) 面接成立までのかかわりの難しさとEメール送信文作成の配慮

前述のように、調査協力を申し出た対象者19名のうち6名が第1回面接に至らず、また、調査が開始された事例においても、その約半数はその後連絡がとれなくなった。関係継続の困難さは、想定していたが、この点にどのように対処していくかは、大きな課題となった。中でも、面接成立までのかかわりの難しさの要因として、対象者の経済的不安定さによる携帯電話端末不通が第一にあげられる。調査中断となった事例について、われわれが把握した主な事由は、以下の通りである。

＜中断の理由＞

- (1) 料金未払いを理由とした携帯電話端末の利用停止によるもの
- (2) 登録された電話番号、Eメールアドレス以外からの着信拒否によるもの
- (3) 連絡用携帯電話端末Eメールアドレスの頻繁な変更によるもの
- (4) Eメールによる関係から対面コミュニケーションへの移行に対する不安や抵抗によるもの
- (5) 生活的不安定さや体調不良等による度重なる面接のキャンセルがもたらす面接者への抵抗、面接意欲の低下によるもの
- (6) 面接場所に指定された公的機関を知らない、情動的支援のみでは、そこまで到着することができないなど、現実的能力の不足により面接意欲が低下することによるもの

かかわりの難しさ、関係継続の困難さの背景に、10代女性の自我の脆弱さ、社会的知識の不足、公的支援に対する信頼の希薄さが読み取れる。このため、Eメールによる関係構築の成否は、送信文作成時に、どれだけこうした10代女性の特性を考慮し、＜調査者でありながらかつ支援者でもある＞という立ち位置を明確に表明し、10代サポーターとしての信頼を得るかが課題となった。調査者は、それぞれ10代女性からも認識しやすい自らの専門性（保育士および助産師）を前面に出し、相談的支援が可能であることを伝えながら、上記の課題に配慮したEメールを送信し続けた。

2) 面接成立までのEメールによる支援の実際

では、具体的にEメールの発信文がどのようなものであったか、事例（A1氏）をあげ、Eメールの内容を見てみよう。表3に、第1回面接成立までの対象者との関係づくりの時期に交わされたEメールの内容を取り出した。そこには、面接成立までの間、対象者とのEメールでのやり取りには、何とかその微かな絆をつなごうとする細やかな配慮がうかがえる。

この段階での語り口は、ていねいであり、調査対象者に対する敬意と感謝が伝わるよう配慮されている。協力者であり、またこれから親になる人として、10代女性にきちんとした言葉で語りかけている。挨拶、体調への気遣い、面接日時や場所の提案、協力者の状況に対する気遣いなどを入れ込みな

がら、「いかがでしょう?」、「お返事お待ちしております」と、協力者の反応を促し、少しずつ双方向のコミュニケーションにつなげていこうと意図している。

また、面接日に無事到着できるかどうか、道案内、出迎え、協力者の状況確認の問い合わせなど、10代母親からは、なかなか表明しにくい不安や戸惑いを想像し、手厚く配慮事項を伝えている点にも着目したい。結局、この事例では、約束の日時に本人は来室できなかった。さらに、＜201x/x/x+6＞の欄を見ると、A1氏が面接への動機づけを保てるように、「キャンセルの理由は体調不良だろうか」と気遣うと共に、「面接日に渡す予定のお土産があったので、都合のよい日時を知らせてほしい」と、ていねいに依頼している。また「お返事お待ちしておりますね」とA1氏が応答しやすいメッセージを加え、関係をつなぐきっかけを探っていることがわかる。

表3 携帯電話端末Eメール内容（継続した事例）

送受信日時 201x/x/x 17:03	A1さんへ/10代サポーターのU（保育士）と申します。こんにちは。この度は、調査への協力をありがとうございます。寒い日が続きますが、体調はいかがですか？さて、こちらからの連絡で申し訳ないのですが、お話を聞かせてもらう日を○月○日（月）の10時頃から…というのはいかがですか？もちろん、都合が悪ければ相談をして他の日にすることもできます。お返事お待ちしておりますね。
201x/x/x 17:27	10代サポーターのUです。/私たちは○月○日（月）の10時ごろにお会いできたらいいな、と思っていますが、学校やその他の用事もあると思うので、できるだけA1さんの希望に合わせていると思っています。いかがでしょう？
201x/x/x 17:39	返信ありがとう/では、来週○日、10時頃にお会いしましょう。こちらこそよろしくお願い申し上げます☆場所は、地域子育て支援センターなどを考えています。A1さんが来やすいところをいくつか考えて、またメールしますね。U
1日後 201x/x/x + 1 10:35	A1さん/こんにちは。10代サポーターのUです。今朝も寒かったですねー。さて、○日（月）にお会いする件ですが、保育園の中にある地域子育て支援センター「△△」ではいかがですか？先日、保健センターの保健師さんから、A保育園のおおよその場所と、妊婦さんから子育てママまでのサポートをしている所というお話は聞いていますよね？そこで会いできたらいいな…と思っています。お返事お待ちしておりますね。
2日後 201x/x/x + 2 18:53	A1さん、こんばんは。/10代サポーターのUです。連絡をありがとうございます。地図を見ながらの説明なので、うまく伝わると思いますが…。A台東の方から来ると、コンビニを過ぎたところにA台南のバス停があります。そこを右に曲がって進むとA保育園があります。う～ん☆わかるかしら？当日、私たちは9時半には着いているので、Uの携帯…か、Kさんの携帯…に電話をしてくれたら、詳しい園の先生と一緒に説明ができると思います。気をつけて来てくださいね。お会いできるのを楽しみにしています☆
201x/x/x + 4 10:20	A1さん/おはようございます。10代サポーターのUです。道に迷っていませんか？住宅街で分かりにくいので心配をしています。迷っていたら連絡をくださいね。
6日後 201x/x/x + 6 14:44	A1さん/こんにちは。10代サポーターのUです。月曜はお会いできず、残念でした。体調があまり良くないのかな？と心配しています。この時期は、どうしても体調が不安定になってしまうので…。A1さんに渡したいお土産もあるので、また都合のよい日をお知らせいただけますか？午前中よりも夕方がよければ、そちらでも良いですよ。都合のよい日を何日か教えて頂けると、ありがたいです。お返事お待ちしておりますね。
13日後 201x/x/x + 13 10:43	A1さん、こんにちは/10代サポーターのUです。メールをどうもありがとう！A1さんの体調も赤ちゃんも順調と聞いてホッとしたよ☆初めてのことで分からないこともあるかもしれないけど、赤ちゃんが順調だと教えてもらえると安心するよねー☆これからも聞きたいこと、気になること何でもメールしてくれれば相談に乗れると思うし、もし会えそうなら、いろいろ話もできると思うので都合のいい日を教えてね☆ではでは☆

注）太字はメール件名、☆は、絵文字挿入箇所

最初のEメール送信から1週間に7通のEメールが10代サポーターからA1氏あてに送信されたが、初回面接日は、連絡なく不来という結果であった。しかし、その後、1週間経ってA1氏から返信があり、調査が可能となった。

表3の最下段にA1氏からの返信に対する10代サポーターの応答<201x/x/x+13>がある。「(母子ともに)順調でほっとした」と、A1氏の状況に関心を持ち、心配していたことをやんわり伝えつつ、妊婦健診で「赤ちゃんが順調だと教えてもらえると安心するよね」と、A1氏の心境に共感的に寄り添うメッセージを送っている。この回では、語り口も変わり、「聞きたいこと、気になることなんでもメールで相談にのれるよ」と、横並びでサポートするお姉さんの位置に転換している。A1氏から面談に応じる気持ちを引き出したのは、肯定的関心の表明と横並び感覚を持った支援者であるというアピールがA1氏に安心感をもたらしたからではないかと思われる。

10代母親は、不安、戸惑い、懸念といった内面の揺らぎをうまく表現することができず、面接の約束をキャンセルする、連絡を絶つといった行動に傾きやすい。そうした心理的側面の特徴に加え、社会的能力の不足により、面談場所(公共機関)までの交通手段が具体的にわからないなど、隠れた困難性を抱える場合もある。そうした状況を共感的に理解し、肯定的関心を持ち、穏やかに語りかけ続けることができるEメール支援は、信頼を立ち上げる過程では、有効であった。

以下に、つなぎの時期のEメール支援の要点を整理した。

<対面に至るまでのつなぎ支援のポイント>

- (1) 協力者として、これから親になる人として、ていねいな対応をする
- (2) 各自の専門性および支援の用意を具体的にわかりやすく伝える
- (3) 対象者からのEメールには、できるだけ速やかに応答する
- (4) 不安や戸惑いの表出など肯定的に受け止めつつ、具体的支援を提案する
- (5) 対象者の状況に対する想像を豊かにし、言葉で語れない現実をこちらが言語化し、確認する
- (6) 感謝、ねぎらい、気づかい、肯定的メッセージなど、情緒的支援につながる表現をできるだけこまめに入れ込む
- (7) キャンセルや無応答に対しても、穏やかに親身なメッセージを送り続ける

表3に示したように、対面のコミュニケーションを成立させるまでの10代サポーターのEメールは、細心の注意を払い、絶妙な距離感を持った語り口で綴られる。10代女性が未知の大人に会い、自分の言葉で語ることに對して抱く抵抗を十分に理解し、安心感、安全感をもたらす配慮に満ちた内容である。『母親になろうとするあなたを大切に思っている』、『少しでもあなたの力になれることがあれば…と願っている』ということがテキストの中から汲み取れるよう、絵文字や記号も活用しながら、肯定的メッセージをていねいに送り続ける。こうした努力により、10代女性の信頼を得、支援者として認知されていく。相当のエネルギーを注ぎ、肯定的関心を示し続けることがこの時期不可欠となる。

また、下の表4に、調査対象者が社会人であり、初回面接は、順調に実施できたが、体調不良により2回目以降の面接が実現せず、中断となっている例をあげた。時候の挨拶や体調を心配するEメールには、時折返信があり、Eメールアドレスの変更連絡等が送信されてくる。何とかEメールというパイプでつながっていることにより、10代サポーターから肯定的関心を示す機会が保持されており、少しずつでも信頼を得るかわりが継続できていると考えられる事例である。

表4 携帯電話端末Eメール内容（中断中の事例）

送受信日時 201x/9/x 14:03	10代サポーターのUです／A2さん こんにちは。明日お会いすることになっている10代サポーターのUです。9月に入ったというのに、暑い毎日だね。体調は大丈夫かしら？明日も暑くなりそうだけど、気をつけて来てね。お会いできるのを楽しみにしています。U
201x/9/x	調査対象A2より返信。体調不良のため、自宅で安静が必要との内容。
201x/9/x 22:48	夜分遅くにごめんなさい／A2さん 10代サポーターのUです。夜分遅くに申し訳ありません。返信が遅くなってホントにごめんなさいね。体調が悪いとのこと、心配ですね。お医者さんの言う通り安静が大事です。この暑さなので無理をしないほうがいいですね。お会いする件は延期にしましょう。私たちの日程調整をして、後日、あらためて連絡をさせて下さいね。まずは、お大事にしてくださいね。
201x/9/x	調査対象A2より返信。面接変更のお詫びの内容。
201x/9/x 22:54	こちらこそ／夜分遅くの連絡になってしまって、余計な心配をかけてしまいました。ごめんなさいね。お腹の赤ちゃんからの、ママ、休んで…というサインですから、ゆっくり休みましょう。わざわざ返信ありがとうございます。U
6日後 201x/9/x+6 12:23	体調はいかがですか？／A2さん 10代サポーターのUです。こんにちは。9月とは思えない暑さ☆その後、体調はいかがですか？私の周りでも体調を崩している人が多くて、ホントに大変な残暑ね…☆でも、クーラーで体を冷やさないように気をつけてね。いま、私たちの日程を調整しているところなので、もう少し待って下さいね。必ず連絡します。
20日後 201x/9/x+20 17:18	10代サポーターのUです／A2さん こんにちは。連絡が遅くなってゴメンなさいね。まだまだ暑いけど、その後体調はいかがですか？来週○日（月）の13時に会えたらいいな…と思っていますが、ご都合いかがかしら？場所は、前回予定をしていた、○○という子育て支援センターです。お返事お待ちしておりますね。U
22日後 201x/9/x+22 13:02	10代サポーターのUです／こんにちは。携帯に電話をさせてもらったけれど、つながらないようなので、メールしますね。おとといのメールでも書いたように、○日（月）もしくは○日（水）のご都合はいかがですか？いずれも13時～を考えています。お返事よろしくをお願いします。
23日後 201x/9/x+23 20:40	10代サポーターのUです／こんばんは。たびたびゴメンなさいね。もし、A2さんの体調と都合が良ければ、○日（水）の午後に会いませんか？その日の都合が悪ければ、10月になったら会いましょう！
201x/9/x+23	調査対象A2より返信。体調回復せず、面接には行けないとの内容。
201x/9/x+23 22:14	お大事にね／A2さん お返事ありがとうございますね。体調、心配だねえ。でも、ご主人は、A2さんと赤ちゃんのことを、とても大事に思っているんだね。残念だけど、今後また機会があったら会いましょう。くれぐれもお大事にね。U

注）太字はメール件名、☆は、絵文字挿入箇所

3) 10代母親から発信された相談内容とそれへの対応

次に、2台の携帯電話端末に送られてきた対象者からの相談内容とそれに対する10代サポーターの応答について、妊娠期、新生児期、乳児期のそれぞれについて分析する。

(1) 妊娠期の相談

お腹の張り、腰痛、服薬してもよいかなど、自身の体調に関わる相談が中心である。10代妊婦では、妊娠期においてもかなり活発に行動している事例が多く、また食事や睡眠といった基本的な母体のケアに注意が向いていないことも多いため、母体保護の観点からの支援が求められる。以下のその例(A3:18歳)を示す。

Q1 (妊娠7ヶ月目): 腰が痛い。温湿布など貼って大丈夫か
貧血がひどく、吐き気がする。どうしたら楽になるか。

<応答1>

腰痛は、温湿布を貼っても大丈夫。妊婦体操するのもよい。貧血で吐き気は、あまり聞かない…急に動いた時に起きるか。それならば、ゆっくり動くように心がける。あとは食事に気をつけて。妊婦体操をやってみようと思うなら資料送る。

Q2: 妊婦体操の資料ほしい。貧血からくる吐き気かわからないが、動き回った後、立ったりした時にふらふらする。気持ち悪い。だるくなることもある。

<応答2>

妊婦体操の分かりやすい資料を送る。吐き気は、貧血ではないかもしれない。妊婦は血液の量が変わり、調整が難しいので、少し座って休むなどすること。体が休憩しようするサインだと思うといい。お腹は張ることはないか?

Q3: 体調が悪いときは無理しないで休むようにする。お腹は最近よく張る。安静にすれば少ししたら落ち着つく。

<応答3>

少し動きすぎかもしれない。お腹が張るときはやすんで。座ってもおさまらない時は、眠る姿勢でやすんで。お腹の張りが強いと、早産になるから…安静に。

(2) 出産直後の相談

出産直後に、面談希望があったケースは、子が低出生体重児のためNICUにてケアを受けており、退院後の育児についての不安が主訴であった。

(3) 退院直後の相談

もっとも頻繁にEメールによる支援が行われているのは、子と共に自宅に戻ったその夜からの何日かである。子と共にいることにより生じる不安、子の訴えを理解し、対応することがうまくできない

という不安が大きく、それを支える家族がいない場合は、集中的な支援が必要となる。以下は、(2)で述べた小さく生まれた子について相談に来ていたA4氏の例をあげる。助産師Kの担当ケースであり、Kの頻繁なEメールによる支援の状況が伺える。保育士Uとも連携し、交代で関わりながら、この時期の不安を乗り越え、母親としての自分を実感できるよう、力づけている支援の実際が読み取れる。こうした介入では、電話による相談、助言も頻繁に行われ、夜間、深夜のEメールにも可能な限り応答している。

表5 携帯電話端末Eメール内容（退院直後の支援）

送受信日時 子を出産 201X/7/X 18:15	おめでとう／メールありがとう！おめでとう。赤ちゃんも大きな病気がなくてよかったね。A4さん、体調は、大丈夫ですか。…私はNICUで働いていたので、何か分からないことがあったら聞いてね。助産師だから、母乳なんかの分からないことがあったら聞いてね。…とにかく、ゆっくり休んでリラックスして過ごしてね。体調が落ち着いたら、お話聞かせてね。いつでも応援しています。私たちが力になれることがあれば、連絡してね。K
6日後 201X/7/X+6 12:06	10代サポーターのUです／A4さん こんにちは。土曜にKさんと一緒にお会いした10代サポーターのU（保育士）です。…産後間もなく、ただでさえ大変なのに、搾乳と○くんの病院通い、家のことまで頑張っていて、すごいなあと思ったよ。でも、ホントに無理しないでね。私もそうだけど、育児って母親だけで頑張れることではないし、パパや周りの人にたくさん頼っていいんだよ。私も力になります！…ということで、私の携帯メールも登録しておいてね。U…54です。どうぞよろしくお願いします。U
9日後 201X/7/X+9	A4から無事退院を知らせるメールあり。＜なにをどうしてあげたらいいかわからない。不安。環境が変わったせいで落ち着かないのか、ミルクが足りないのか、ピーっと泣くだけでわからない。今日は寝られない＞との訴え。
9日後 201X/7/X+9 23:49	Re:こんばんわ／退院おめでとう！早かったね～退院！初日は緊張だね。あまり心配しないでね。とりあえず、3時間おきに、オムツを替えて、母乳をあげて、げっぷを出して（出なくてもOK）、オムツ見て、寝かせ、自分も寝る。これを繰り返してみては。泣かなくてもやってみては。リズムもつくし、自分の休む時間も確保できるよ。K
10日後 201X/7/X+10	A4から返信あり。子がくうとうとしておっぱいを飲まないがどうしたらいいか＞
201X/7/X+10 0:04	Re:こんばんわ！／夜だから、搾った母乳をほ乳瓶であげてみては！直接飲ませるのは、昼間頑張って。
201X/7/X+10	A4から返信あり。＜頑張ってみる＞とのこと。
201X/7/X+10 0:09	Re:こんばんわ！／応援してます☆初めての夜だから、緊張だよ。でも大丈夫☆無事に過ごせるよ！分からないことがあったら、またメールしてね。気づいたら返信します。…ガンバ！K
201X/7/X+10	A4から返信あり。＜遅くに申し訳ない＞とのこと。
201X/7/X+10 0:12	Re:こんばんわ！／大丈夫☆大丈夫☆少しは眠ってね～☆K
201X/7/X+10	A4から返信あり。＜ありがとうございます＞とのこと。
201X/7/X+10 11:07	頑張ってるね～！／昨晚はお疲れ様☆仕事の途中でメールしてます。赤ちゃんは、寝ないで起きてる時もあるからね。心配かもしれないけど、ずっと見守り続けなくても、自分は寝たり、家のことをしてもいいからね～☆当面、3時間おきに母乳の時間を決め（多少ずれても可能）お世話してみてもいい☆赤ちゃんがもっと泣いて自分の欲求をしめすまではね☆保健センターの担当の○○さんに、訪問に来てもらって相談するのもいいと思います☆何かあったらまたメールしてね～☆K
201X/7/X+10 17:42	大丈夫？／A4さん 保育士のUです。すぐに連絡してあげられなくてゴメンね。退院できて良かったけど、大丈夫？何が不安かな？6時半過ぎなら電話できるのだけど、電話しようか？U
201X/7/X+10	A4から返信あり。子がくうで泣いているかわからない＞との訴え。

201X/7/X+10 17:48	Re:／大丈夫だよ、落ち着いてね。A4子にとっては初めてのおうちで、どこかな？と思って泣いてるのかな？いま電車だから、あと30分くらい待ってね。U
201X/7/X+10 18:30	保育士UからA4に電話を入れる。＜自分でやっていけるか不安だが、助産師Kからいろいろ教えてもらって何とかやっている＞とのこと。子の状況も大きな問題はないようであった。保健師〇さんとも連絡取れており、訪問予定も決まっていた。
201X/7/X+10 22:01	Kから発信：2日目の夜だけど、大丈夫そう☆電話しようか☆K
201X/7/X+10	A4から返信あり。＜Uと電話で話した。子も落ち着いている＞とのこと。
201X/7/X+10 22:07	Re:そうか。よかったね☆昨日と言ったことは同じだけど、とりあえず3時間おきにやってみてね。ミルクをやってるの☆母乳が出てるなら、搾ってでも母乳あげたほうがいいよ。出なくなっちゃうから…もし分からないことがあったらまたメールしてね～K
201X/7/X+10	A4から返信あり。感謝のことばあり。
201X/7/X+10 22:11	Re:／よかった☆肩の力抜いて、ポチポチやってね～応援しています。起きたら返信するから、メールしてね～K
11日後 201X/7/X+11 11:31	昨晩は／大丈夫だったのね～☆少しずつ慣れていってね☆K
16日後 201X/7/X+16	A4からEメールあり。A4子の鼻づまりに対する手当について、不安を訴える内容。
201X/7/X+16 18:32	Re:こんにちは／こんにちは。仕事で返事が遅れてごめんなさい。鼻がグズグズしてるんだね。綿棒でお鼻掃除をしてみたら☆水っぽくてとれない場合は、薬局で相談して、スポイドみたいな吸い取るものが売ってると思うから、それを使ってみたら☆お母さんが片方の鼻ずつ自分の口で吸ってあげるのもいいです（その前にきちんと口をゆすいでね☆）くしゃみは出てもいいけど、セキもできますか☆その辺を少し教えてね。今は電車で、電話ができないけど後で電話しようか☆K
201X/7/X+16 18:34	A4から返信あり。電話での相談を希望。Kから電話を入れ、子の状況を確認、助言する。

注）太字はメール件名、☆は、絵文字挿入箇所

最初のメールは、①A4氏の無事出産を祝う、②体調の確認、③「何か分からないことがあったら聞いてね。」と支援の呼びかけ、④「とにかく、ゆっくり休んでリラックスして過ごしてね。」と助言、⑤「いつでも応援しています。私たちで力になれることがあれば、連絡してね。」と再度支援の呼びかけを行っている。そして、低出生体重児である子の入院期間中に、保育士資格を持つ10代サポーターからもEメールを送信し、「育児って母親だけで頑張れることではないし、パパや周りの人にたくさん頼っていいんだよ。私も力になります！…私の携帯メールも登録しておいてね。」と、子の退院後の母子の困難性を予測し、サポート体制を強化している点は、重要である。

出産後9日目にA4氏の子が退院し、それを知らせるメールが来た。同時に、子がくピーっと泣くだけでわからない。今日は寝られない＞との訴えが届く。助産師である10代サポーターは、A4氏の状況の深刻さを理解し、「初日は緊張だね。あまり心配しないでね。」と支えながら、「3時間おきに、オムツを替えて、母乳をあげて、げっぷを出して（出なくてもOK）、オムツ見て、寝かせ、自分も寝る。これを繰り返してみては。」と、必要な養育の手順を具体的に示している。その後も、①母乳のケア、②子の鼻づまりへの対処等、具体的な方法をEメールで示し、タイミングを見計らって電話で確認するという支援を行った。

新生児期には、このような養育に関わる具体的な質問が多くなる。子の状況を確認しながら、適切

な養育の手順を伝え、10代母親の挫けそうな心を支える支援が併行して進んでいく。この時期の主な相談内容を取り出してみた。

＜新生児期の相談内容＞

- A) ミルクの飲みが悪い、どのくらい飲ませればよいか
- B) 白湯や麦茶など乳以外の飲み物を与えてよいか、その量は？
- C) 風呂に入れるのが怖い
- D) 自分も便秘、子も便秘。どうすればいいか
- E) 子が寝てくれない、ずっと寝ていて心配など睡眠をめぐる不安
- F) 口の中の拭き方はどうすればよいか
- G) よく熱がでる。大丈夫か？
- H) 風邪、嘔吐、下痢とずっと調子が悪い。体重も増えない。大丈夫か？
- I) 皮膚が赤くなった、ぶつぶつができた、大丈夫か？
- J) うつぶせ寝をさせてもよいか？

哺乳、睡眠、沐浴、排泄に関する様々な不安、疑問など、初めて親になる人に共通の戸惑い、自信のなさがかえらる。それに加え、実母と暮らしている対象者からも夜遅くにEメールが入るなど、彼らが身近な大人にうまくSOSを発信できない（SOSを受けてもらえないとあきらめている）状況も見えてきた。それまでの周囲の大人との関係の持ち方を反映するものと考えられるが、①養育の手順を具体的に伝える養育者モデルがない、②必要なことを身近な大人に気軽に聞けない、③必要な養育の知識、技術を具体的に学ぶ機会を自力で得られない、④子育ての情報を得る手段が限られるなど、10代母親に特有の状況が捉えられた。

4) 次第に脆弱化する養育環境 ―Eメール支援の限界―

子が1ヶ月を過ぎる頃になると、養育の相談に加え、就労や生活面の問題に関する相談が寄せられるようになる。それだけ、子が育つ環境は、不安定な要素を抱えており、10代親たちが現実的な生活の課題に直面しながら、子の養育に注力できない状況がEメールからも伺える。就労と子の養育の両立をめぐる公的支援が必要なケースが多い。

子の父が抱える借金の返済、子の祖父母の困窮、無関心など、母子の生計を支える基盤がないため、子の母が就労せざるを得ない場合、夜間の接客業に就く可能性が高い。教育歴の低さや紹介ネットワークの狭さから、子の養育との両立を図る仕事に就く機会は、なかなか得られないのが現状である。また、一方で、育ちゆく子の側にも、トラブルが頻発する身体的過敏性や発達の偏りが見られ、養育上の負担感や疲労感が大きくなりがちな状況もその特徴と言える。

Eメール支援の関わりを通し、10代親のそうした窮状を把握し、公的支援につなげるなど、直接的介入に関与できたケースは、少なくなかった。しかし、思うように具体的支援が進まず、10代親の落胆や苛立ちが我々10代サポーターとの関係に影を落とすことにもなった。Eメール支援の限界を示す事例を次の図2に示した。

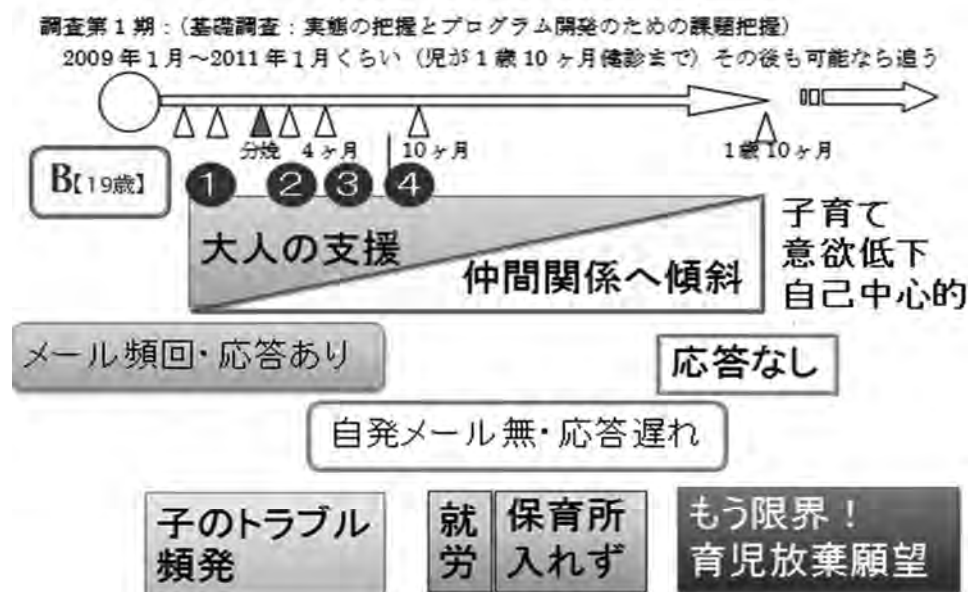


図2 養育困難が顕在化した事例

この事例では、妊娠期から4回の面接を継続することができ、Eメールによるかかわりも10ヶ月過ぎまで順調に継続されてきていた。また、子の身体的トラブルが続き、通院や養育上の配慮が必要となっていたが、子が4ヶ月頃を迎えるまでは、近隣にサポートする人材もあり、10代母親の養育への意欲は、高かった。

しかし、生後4ヶ月を過ぎる頃から、様々な事情から近隣の大人の支援は徐々に欠けて行った。10代親は、孤独を埋め、不安を紛らわすため、次第に同年代の友人との関係に傾斜していくことになった。同年代の友人との交流が頻繁になり、子が8ヶ月を迎える頃、経済的困窮から就労を希望し、保育の場を探すようになった。

ところが、乳児を抱えながらの就職活動は、スムーズに進まなかった。この時期、公的保育サービスなどの地域支援資源を活用したサポートへの移行を準備し、10代サポーターからも母親への働きかけを行った。しかし、生後10か月目の面接は、当日キャンセルとなった。妊娠期からのEメールの発信や返信がよくあり、Eメール応答性が高かった事例であるが、次第に10代母親からの自発的なEメールは減少し、10代サポーターからのEメールへの反応もこの頃には、遅れがちになっていた。その後、連携して支援を行ってきた地域担当保健師が訪問すると、憔悴した表情で「疲れた。子どもをおいて仕事に出たい」と10代母親は訴えるようになった。

身近にいた大人の支援者が周囲から次々と離れていく中、見捨てられ感が広がり、養育の負担感と孤立感が大きくなったものと思われる。とにかく「子どもから離れたい」という思いが強くなり、現実的にこの状況を解決しようという気力は失われていたようである。

この時点では、Eメールによる情報支援や情緒的支援は、力を持たず、より積極的な介入により、物理的な支援の手立てを講じる必要があった。大人が自分を見捨てていったとの思いが強くなり、そのために大人を拒否する心性も生まれていたものと思われる。

5. Eメールの内容分析 活用パターン＜B＞および＜C＞

次に、活用パターン＜B＞および＜C＞について、Eメール分析から得られた重要な点を述べる。表6にその内容の概要を示した。調査メンバーおよび関係機関の協力者間の連携のために活用され、対象者を支援するネットワーク構築を進めたことである。物理的に離れていながら地域支援のネットワークに円滑につながり、調査者二名が相互に必要な情報の共有をていねいにしながら、適宜支援的にかかわりを継続できたのは、携帯電話端末のEメール機能の活用に負うところが大きい。

表6 携帯電話端末Eメール内容（連携への活用）

B：A市研究協力担当者 ⇄ 調査者：10代サポーター	
B-1	(A市研究協力担当者 ⇒ 調査者：10代サポーター)
	① 研究協力の意志を示した10代女性の連絡先伝達
	② 調査対象者に関する伝達事項がある場合の連絡
	③ 研究情報共有の必要がある場合の申し出および機会設定連絡
B-2	④ 研究協力に関する課題発生時の連絡
	(調査者：10代サポーター ⇒ A市研究協力担当者)
	① 研究対象者出現状況の確認
	② 面接日時の設定、面接場所の検討・依頼
	③ 支援状況の報告および共有
	④ 危機介入の必要がある場合の検討・依頼
C：調査者：10代サポーター ⇄ 調査者：10代サポーター	
	① 対象者の進行状況、情報共有のための連絡
	② 対象者の状況に緊急支援の必要性が認められた場合の検討
	③ サポーター同士の日程調整、事務連絡

6. まとめと今後の課題

Eメールの分析から、Eメールによる支援がもたらした最も顕著な効果は、保育士、助産師の専門性を生かした、即応性の高い情報提供力と、言語によるたゆまぬ励まし、エンパワーメントの提供であったと言える。安心感を持って養育に向かえるように、10代母親に対し一貫して肯定的メッセージを送り続け、彼らの自己効力の感覚を高める役割を担っていた。

『母親になろうとするあなたを大切に思っている』、『少しでもあなたの力になれることがあれば…と願っている』というメッセージに代表されるように、10代母親への敬意と肯定的関心がEメールで送られたテキストの中に確認された。

妊娠にいたる経過の背景に、周囲の大人（特に保護者）との葛藤的關係や、家庭や学校に不適応や居心地の悪さが認められる事例が多く、それは、初回面接までのつながり難さにもつながっていた。

そうした10代母親の傷つきやすさや自信のなさに配慮しながら、また、適度な距離感を保ちながらも、コミュニケーションを継続していくことができる点は、Eメールを活用した支援の大きな利点であった。

①養育の手順を具体的に伝える養育者モデルがない、②必要なことを身近な大人に気軽に聞けない、③必要な養育の知識、技術を具体的に学ぶ機会を自力で得られない、④子育ての情報を得る手段が限られるなど、10代母親に特有の困難に対しても、Eメールや携帯電話を活用することにより、状況を好転させる可能性があることも確認された。

一方、見捨てられ感や孤立感等が深刻なケースでは、Eメールによる情報支援や情緒的支援といった間接的支援ではなく、より積極的な直接介入（対面、同行の支援等）により、物理的な援助の手応えが伴う手立てを講じる必要があることも明らかになった。

今回の分析で捉えられたEメール支援の効果と限界性および以下にあげた思春期心性に関しては、さらに縦断的研究を継続することにより検討し、有効な支援の方策を明らかにしたい。

- (1) 自我の脆弱性がもたらす関係継続の困難性
- (2) 妊娠と出産の決断の過程がもたらす自己効力感の回復
- (3) 子との生活の中で明確になる自信の無さ、不安から回避感情が増大
- (4) 孤立感から抑うつ気分が広がりやすく、無気力、投げやりな態度につながりやすい
- (5) 安易な解決、問題の回避を好み、新しい学習への抵抗が生じやすい
- (6) 他者の情緒的支援を受け入れる健康さは、生活の悪化などの負荷による低下する
- (7) 孤立感を埋めるための性的関係への傾斜
- (8) 大人への依存と介入の回避が葛藤的に存在する

謝辞

本研究の一部は、平成26年度東洋大学国内特別研究の助成を受けて実施した研究の成果である。ここに記すと共に、貴重な機会を与えてくださった関係各位に心から感謝申し上げます。

参考文献

- 渡辺久子（2000） 母子臨床の世代間伝達 金剛出版
- 森田明美（2008） 10代の出産・子育ての現状と福祉的支援の課題 思春期学 vol.26 No.1 p134-139
- 上田美香（2008） 10代子育て家庭への妊娠・出産直後の保健と福祉の連携による支援に関する研究 東洋大学 人間科学総合研究所紀要第9号 p11-21
- 唐田順子（2007） 乳幼児をもつ母親のサポート状況と育児不安との関連－病産院サポートを含めた分析－ 母性衛生第48巻4号
- 中原美恵（2008） 養育困難をかかえる保護者への支援 子育て支援カウンセリング 図書文化社 p.70-87
- 中原美恵（2013） 乳児期の発達 発達と臨床の心理学 ナカニシヤ出版 p.21-36
- 西澤哲（2012） 子ども虐待と精神的問題 虐待を受けた子どものケアと治療 診断と治療社 p2-17
- 近藤卓（2010） 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房
- 杉山登志郎編著（2013） 子ども虐待への新たなケア 学研教育出版

A study on psychological support from the pregnancy period to the teenage mother
— Analysis of the support that utilized the E-mail for the teenage mother —

NAKAHARA Yoshie, UEDA Mika, KARATA Noriko

Abstract

This study analyzes the problems of pregnancy, birth and child care of teenage lone-mothers, the number of which is quickly increasing in Japan in recent year. From this study, the actual conditions of the problems have been made clear. By use of E-mail psychological supports for them in this study, the effectiveness of the measure employed is confirmed. It is found quite helpful for teenage mothers to feed them with positive messages consistently and continuously by E-mail in order to enhance their sense of self-efficacy, so that they can engage in nurturing and child care with ease of security and confidence. Three conclusions of this study are: Firstly, the rearing and child care model is absent for teenage lone-mothers; Secondly, they are not adequately taught and trained the child care techniques; and Finally, they can not easily acquire necessary information on nurturing and child care.

The important point revealed from this study is the necessity of establishing a firm family policy and to provide appropriate guidance to young parents for child care.